

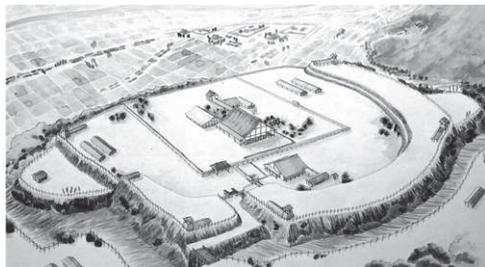
わがまち歴史散歩

中世池田の城と「市庭」 いちば/いちにわ

○池田氏と城をめぐる

『新修池田市史』第1巻には建武3年(1336)に初めて池田城が同時代の記録にその名を現わし、その後天正2年(1574)荒木村重あらかむらじむねによる廢城、さらには織田信長による伊丹城攻略まで、池田の城をめぐる数々の出来事が文献から、また考古学的な発掘調査から丹念に追究され、記述されています。

城は、中世池田氏理解の力であり、池田氏の存在は、日本の中世理解のヒントとなっているようです。実際、池田氏をめぐる歴代の当主池田氏と、その上位に位置した細川氏・山名氏さらには



▲池田城想像復元図

三好氏など室町政権の有力武将との関わり、それらと絡んだ池田氏内部の争いなど、複雑な状況の展開がありました。

日本の中世をとおして池田氏は、実に波乱に満ちた戦いを続けています。池田氏は、一族の分裂・抗争も経験しつつ、したたかに戦乱の世を生き抜いたのですが、最後には歴史の表舞台からは姿を消していきました。

池田氏と池田の城については江戸時代の『池田村絵図』(1697年)や『穴織宮拾要記』(17世紀半ば成立、伊居太神社いけだ蔵)など、地元でも早くから歴史的興味の対象となっていました。1990年前後の頃は、『新修池田市史』第1巻刊行をはじめ、考古学的調査とあいまち、その認識が大きく進展しました。学会からも大きな注目を受け、現在でも研究が進められています。

○市場の存在

ところで、池田の城をめぐる攻防の記録を探っていくと、その中に「市庭」を焼くといった文言が出てきます。すなわち、天文15年

(1546)細川氏綱うじつなに味方する池田信正のぶまさを細川晴元はるもとが攻めたこと、『細川両家記』に「その日池田へ取懸とりかけ、西の口より一番に三好加助入らるゝ。二番に淡路衆・伊丹衆入らるゝ。則ち市庭を放火する也」とあります。「西の口」とありますから、おそらく現在も急な崖となっている城址じょうし西方の平地の辺りでしょう。その広がりには分かりませんが、そこに「市庭」＝市場があったと思われる。

市場は、商品交換や金融活動などの結節点です。各地に続く街道もあつたでしょう。そういうえば、近世池田の酒造家として大きな存在であった満願寺屋も室町時代には池田で酒造りが始まっていたことを語っています。周辺地域では茶の栽培も広がっていました。金の力を知り、また金満家として知られた池田氏にとって、このような「市庭」＝市場は不可欠な存在だったのでしょう。

永禄11年(1568)に織田信長が池田を攻めて池田勝正かつまさを降参させたとき、「大軍を以て外構そとがまえ放火せられ、即ち池田降参」(『永

禄記」とあることも、先の天文15年の経験から大事な「市庭」あるいは「町」を曲輪まがらの中(今回は能勢街道沿いかも)に取り込んでおこうとした結果かもしれません。それが焼かれたから城は持ち切れなかったと判断したのかもしれない。

○近世社会とのつながり

江戸時代、池田は商品流通の盛んな在郷町として発展します。しかし、ここには中世に権勢をふるった池田氏はもちろん、それに代わる大名も存在していません。では、「市庭」＝市場の商人たちはどうなったのでしょうか。そもそも、室町期から戦国期にいかなる町が形成され、どのような人びとがそれを支えたのでしょうか。また、江戸時代との関係はどうだったのでしょうか。そのつながり、あるいは断絶を知ることが、今後の大きな課題となってくると思います。

(市史編纂委員会委員長・小田康徳)
◆問い合わせは生涯学習推進課市史編纂(☎754・6674)